
障がい者アートと日本での今後の展望

～グレイアイ～

兵庫県立芸術文化センター 事業部 安田江

1. グレイアイの沿革と組織

グレイアイは1980年に創設された、障がい者パフォーミングアーツの先駆的団体である。30年以上に及ぶ活動の歴史で、彼らの存在を英国内のみならず全世界に知らしめることが出来ているカンパニーであり、現在の日本では同様の活動をしている団体は存在しないと思われる。創設者の1人であり、映像の世界でも活躍するナビール・シャーバン氏は自身も障がい者である。かつて舞台に立つことを志し、さまざまな出演機会を探すも、ことごとく断られてしまう。「それならば、自分たちで活動の場をつくろう」ということでこのカンパニーを設立した。そこから現在に至るまでの活動は、英国のみならず全世界に大きなインパクトを与えた。

現芸術監督は1997年に就任したジェニー・シーレイ氏である。手話や音声描写を演出的に活用した革新的な作品を創作し、障がいのない人にはもちろんのこと、ある人も楽しむことのできるパフォーマンスを世に送り出している。野外公演の実績も多く、限らない空間を最大限に活用した表現は観るもの全てを魅了する。何度か訪日しており、ワークショップや公演製作で、日本のアーティストや障がい者との交流を行っている。直近では2016年の1月に開催されたシンポジウム「障害の先にあるパフォーマンスが社会にもたらすもの」の

パネリストとして来日、パワフルに熱弁をふるった。日本は第二の故郷と言い、大変な親日家である。

芸術監督シーレイ氏のもと、総括部門・制作部門・財政部門と3つの部署に分かれ、事業展開を行っている。カンパニーの年間予算は100万ユーロほどであり、収入の半分強がアーツ・カウンシル・イングランドからの助成金である。30%程度が寄付金や運用金で、20%程度が入場料等収入となっている。

2. グレイアイの事業展開

(1) 公演活動

グレイアイは特定のレジデントシアターで上演するカンパニーではない。英国内の劇場と連携しながら、そのエリアの観客に自分たちの作品を鑑賞してもらえるよう、年1本程度のツアー公演を行っている。集客や観客対応、広報展開をツアーする劇場が行い、舞台製作及び広報支援をグレイアイが担うという役割分担である。2013年はブレヒトの『三文オペラ』を上演。パフォーマンス的にも音楽的にもレベルの高い作品を製作し、英国内9会場でのツアー公演を行った。その後『血の婚礼』『砂糖水の固い生命』と演劇作品を製作・上演している。公演プロモートのために、字幕と音声解説が付いた映像を準備し、その映像をツアー劇場に提供したり、カンパニーのウェブサイトに掲

載し、多くの方に作品内容が伝えられるよう工夫している。またリーフレットやポスターの文字を大きくし、簡単に読むことが出来るように対応している。点字対応のリーフレットを用意することもある。

野外公演を積極的に展開しているのもこのカンパニーの特徴である。全長5mの巨大パペット「アイアンマン」は、パペットを操るスタッフ、ミュージシャン、パフォーマーで構成される屋外エンターテインメントである。晴天の下で子どもから大人までで楽しめるグレイアイの代表的パフォーマンスとして、英国内の野外フェスティバルで繰り返し上演されている。

海外での活動実績も増えており、特に2012年のロンドン五輪大会以降、国外の障がい者アーティストとのコラボレート作品を上演している。2013/14年はアルバニア、パキスタン、バングラデシュ、そしてブラジルでの上演実績がある。

(2) 教育プログラム

全ての人が等しく芸術に触れ合える環境をつくることをモットーに、若者や子ども、社会コミュニティ等、さまざまなカテゴリーに対してのプログラムを提供し、活動を行っている。学校のワークショップは公演ツアー時に訪れたエリアの学校に対して、年間100回程度行っている。そして障がい者が芸術に触れ合うきっかけづくりを行っている。

戦場や紛争等で負傷した軍人向けに空中パフォーマンスのトレーニングシステムを行い、元軍人たちの社会的活躍の機会を提供できる場を創造し、ゆくゆくはこのトレーニングを受けた人たちが障がい者アートの指導者になれるような道筋をつくっている。

(3) 人材育成

グレイアイは障がい者アーティストの育成はもちろんのこと、障がい者のクリエイターの育成も熱心に行っている。執筆家の育成訓練“Write to Play”、次世代アーティストの発掘、育成事業“Ensemble”等である。“Ensemble”は、舞台芸術を志す若い障がい者向けのトレーニングコースを開設し、彼らがこの分野で活躍できる道筋をつくっている。また特筆すべ

き活動として挙げておきたいのは、トレーナーの育成である。パフォーマーを育成するためのトレーナーはカンパニー成立のため不可欠な要素であるが、グレイアイは元パフォーマーやパラリンピック出演経験のある選手等を活用し、しっかりとした人材を恒久的に輩出する流れを組み立てている。通常の専門性に加え、福祉的環境下におけるノウハウにも一定の理解のある優秀なトレーナーを確保し、育てていくことはこのカンパニーや、障がい者アートを継続して実演していくために必要不可欠である。

グレイアイはスタッフとして障がい者も多く雇用している。全従業員174名のうち、障がい者が79名(2013年現在)となっている。彼らに活動の場を提供し、社会的に貢献できる役割を担っている。

3. 施設概要

2009年に新設されたオフィスは完全バリアフリー対応となっており、障がい者アーティストに使いやすいようさまざまな工夫が施されている。リハーサル室には耳が聞こえないアーティストに文字や図等で分かりやすく説明できるよう大きな黒板が設置されており、また手足が不自由なアーティストにも操作したり説明することができる字幕スクリーンも用意されている。オフィスの椅子は肘置きがないのだが、これは手話通訳しやすいようにとの配慮のためである。フロアマップは点字対応されており、まだドアは自動化されている。廊下の手すりには溝がついており、その溝で廊下の突き当たりが識別できるようになっている。

4. カルチャル・オリンピアドとの関わり

シーレイ氏の活動のハイライトは、彼女が2012年ロンドンパラリンピック大会開会式の共同演出を担当したことである。このパラリンピックは史上最多の164の国・地域から4,280名の選手が参加した。開会式では耳が聞こえないアーティストも、身体が不自由なアーティストも皆協働し、世界中の人々に楽しんでもらえるショーを手掛けた。これは他に類のない、人々の記憶にいつまでも残るものであった。後にシーレイ氏は、これは一生に一度の機会と語っている。

開会式には延べ3,000名が参加し、障がい者が手掛けた人類史上最も大きなイベントと位置付けられ、全世界で中継された。日本でもEテレが中継したこの開会式は、延べ20億人が観たと言われている。その場で、理論物理学者のスティーブン・ホーキング博士が述べた一言“*We are all different*”という、皆で同じ精神を分かち合う未来志向のメッセージに、このパラリンピックの開催意義の全てが凝縮されているともいえる。



【写真1】リハーサルルーム

多くの人が開会式を観ることにより、社会に大きなインパクトを与えた。この開会式は芸術的にも素晴らしいものであり、多くの人の心を動かした。そしてその後開催された競技大会とも乗じて、芸術やスポーツの分野で活躍する障がい者の姿を見る機会が多くなり、彼らが社会にとってより身近な存在となっていく。英国ではテレビに出演する方々のうち、障がい者の割合が1%程度で、ジェニー氏に言わせれば「少ない」とのことだが、この割合も2012年前後から増えており、社会が多様性を受け入れ始めた事例ともいえる。また、この2012年ロンドン大会と並行して開催された文化プログラム“*London 2012 Festival*”にはいくつかの障

がい者パフォーミングアーツも含まれる。代表例としてはロンドンのサウスバンクセンターで開催された「アンリミティッド・フェスティバル」であるが、グレイアイの製作スタッフが積極的に携わったプログラムとして、2012年6月の国際フェスティバルで上演された屋外劇「プロメテウスは目を覚ます」という作品がある。92名のパフォーマーが参加し、うち46名が空中で演技するという大規模なもので、この作品に出演するメンバーは公募で選ばれた。46名の中には障がい者や車いす利用者もあり、各々の適性に合った形でのリハーサルを進め、本番に臨んだ。このスタッフワークは後々のグレイアイの活動にも良い影響を与え、現在に至るまでこの時のメンバーとの創作活動が継続している。これは、2012年大会がもたらした文化的「レガシー」の事例となっている。

また、観客の視線にも変化が現れた。つまり「障がいがあるのにあんな事ができてすごいね」という見方ではなく、「障がいのあるなしにかかわらず、さまざまなアーティストが素晴らしい活動をしている」という視線への変化である。

5. まとめ

近年、グローバル化が一気に進み、世界中の物事に対する敷居が低くなっている。一方、これまでの日本では体験できなかったような「個人の多様性」が身近に意識されるようになる。それは例えば国籍であり、性別であり、障がいの有無もそうである。日本人は表面上単一民族で、その立地条件的な影響もあって独自の文化や考え方を長らく培っており、自分たちと「異なるもの」に違和感を覚えることが多い。一方、ここ数年飛躍的に増えている訪日外国人やそれに伴うさまざまな交流、そして「我々とは異なる」事を感じずにはいられない局面もこれから大いに増えてくるであろう。大切なことはその「違い」、つまり「多様性」を認識し、尊重し自分との交流を深めていくことである。2020年に向けて日本全体がより一層そのような意識をもつことが求められ、やがてそれが当たり前のこととなるのではないか。そして大げさに言ってしまうと人類共生の社会を目指す歯車の一つとなることが

我々に求められる。

英国が長い時間をかけて培った芸術文化や劇場の歴史には、そのまま英国の社会的背景が色濃く反映されている。それは重厚な歴史でもあり、政治的課題が色濃く反映されている局面も多くある。それらの課題をクリアしていく過程やその結果で、芸術文化と市民の距離が近づき、市民がそれらを愛してきたのが英国の歴史である。その距離感の近さは私たち日本の劇場・音楽堂等の関係者にとってうらやましいものでもあり、また目指してみたいと思えるものだ。



【写真2】オフィスルーム

グレイアイにも同じことがいえる。彼らが30年以上かけて培った「障がい者アート」の先駆的な活動事例も、決して個人や一団体の思いではなく、その時々での社会的課題にコミットしたものである。それらをときには大いに議論しながら、場合によっては逆戻りしながらも確実に培ってきていると感じる。日本でもさまざまな障がい者アートのプログラムが開催されているが、社会と障がい者の距離感を縮めていながら、このアートが2020年に向け、さらに市民権を得ていくであろう。ただ、一気にやろうとしても課題はたくさん出てくる。一過性のものにせず、継続的に取り組める「レガシー」を、2020年東京オリンピック・パラリンピックをきっかけとしてつくり上げることが大切である。



施設概要

グレイアイ・シアター・カンパニー



Patrick Baldwin

- 名称 ————— Graeae Theatre Company
- 所在地 ————— Broadway Studios, 138 Kingsland Road, London, E2 8DY
- 設立年 ————— 1980 年
- 施設概要 ————— 2009 年に完全バリアフリーのオフィスを開設
ミーティングルーム、リハーサルルーム併設
- URL ————— <http://www.graeae.org/>
- 年間観客数 ————— 22,000 人
- 従業員数 ————— 174 名 内79名が障がい者
- 参加者数 ————— 4,640 人 ワークショップやトレーニングプログラム等に参加した人数
- 公演数 ————— 英国内11会場で公演、3つの海外フェスティバルに参加
- 年間予算 ————— 109万6,251ポンド